

<実践報告>

「信大YOU遊世間」における実践的指導力の基礎の構造と陶冶

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

関川光彦 長野県農業大学校講師

The Structure and Cultivation of the Foundation of Practical Teaching Ability in 'You-Yu World at Shinshu University'

DOI Susumu : Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

SEKIGAWA Mitsuhiko : Nagano College of Agriculture

研究の目的	信州大学教育学部において10年目を迎えた「信大YOU遊世間」において学生が陶冶している実践的指導力の基礎の内実とその構造を明らかにする。
キーワード	実践的指導力 信大YOU遊世間(ワールド) 地域貢献 使命感
実践の内容	平成15年度には次の10プラザが開設された。「信大YOU遊興譲館」「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」「虹色アトム」「キャンパス・プレーパーク」「XYサタデースクール」「わらの会」「城山中間教室」「湯谷小子どもランド」「信州須坂町並みの会・町並みフェスト2003への出前講座」
実践者名	丸山大輔, 藤田優子, 五味潤嘉, 前崎伸周, 北川伸尚, 熊田賢人 石関千絵ほか68名
対象者	上記の10のプラザの活動に参加した幼児・児童・生徒(約300名)
実践期間	2003年2月～2004年2月
実践研究の方法と経過	実践的指導力の基礎の陶冶と大学の地域貢献という主旨に賛同した学生が自主的, 主体的に討議を重ね, 平成15年3月4日に「信大YOU遊世間」の発足式が行われた。会場の「竹」の部屋には藤沢謙一郎教育学部長, 古平政義事務長, 学生有志17名が集った。各プラザの活動は主に土曜日に実施し, その振りかえりを毎週火曜日5コマ目に「松」の部屋で行った。12月に実践報告を執筆し平成16年1月に学長裁量経費により報告書を発行した。この中から筆者が運営委員7名の事例を取り上げ考察した。
実践から得られた知見・提言	学生は自主的, 主体的な意志にもとづいて「信大YOU遊世間」の実践に取り組むことによって, 実践的指導力の基礎である企画力・コミュニケーション力を培うとともに, かけがえのない友情を体験し, 教職への使命感を深くしている。

## 1. はじめに

平成17年4月に文部科学省から平成17年度「大学・大学院における教員養成推進プログラム」(教員養成GP)の公募要領が発表された。この事業の背景・目的として「近年、学校教育が抱える課題が、益々複雑化・多様化する中であって、社会から信頼される学校づくりを進めるためには、高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた教員の養成及び現職教員の再教育の一層の充実が不可欠」であるとし、実践的指導力がキーワードとして掲げられた。一方、平成17年9月に北海道教育大学釧路校で開催される日本教師教育学会第15回研究大会のテーマが「教師の実践的指導力の養成と地域連携」と設定され、15年目を迎えた日本教師教育学会の研究課題も教師の実践的指導力に焦点が当てられている。

教員の養成段階において、今強く求められている実践的指導力の基礎はどのように陶冶されているのか、学生が陶冶した実践的指導力の基礎の内実は一体どのようなものであるのか、このことを明らかにするために、本稿では平成15年度の「信大YOU遊世間」運営委員として活躍した7名の学生の実践記録(土井編, 2004)を分析することによって考察する。

## 2. 実践的指導力の構造

### 2.1 実践的指導力の概念

前述の日本教師教育学会第15回研究大会の開催要領(2005年4月)では、多様な見解がある実践的指導力の概念について、「教科指導・生徒指導・学級経営・地域教育等の教育実践に関する包括的な指導力を兼ね備え、子ども・学校・地域の実態に合わせて柔軟かつ創造的に指導内容・方法を採用し、それを遂行する能力」であると示している。そして、実践的指導力とは、「学級経営・生徒指導・教科指導や校務分掌など、どれかのみに通じる能力ではなく、トータルな遂行能力」であるとも述べて、実践的指導力が総合的な力量であることを強調している。

そもそも教師に実践的指導力が求められるとしてこの言葉が初めて使われたのは18年前の教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策について」(1987年12月)においてであった。そこでは実践的指導力の概念が次のように示された。

「学校教育の直接の担い手である教員の活動は、人間の心身の発達にかかわるものであり、幼児・児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような専門職としての教員の職責にかんがみ、教員については、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である。」

その後、1998年7月の教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」においては、教員の養成段階にある学生が習得すべき実践的指導力の基礎とは「採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」であると示している。これらの答申から考えられることは、実践的指導力とは学級経営においても、教科指導においても、さらには生

徒指導においても、教師が児童・生徒と関わりながら教師としての本領を発揮し、職務を遂行していくことのできる力量であると捉えられる。ここで重要なことは教科指導において「各教科」の専門的知識を児童・生徒に習得させるという教師の職務を遂行するためには、教師と児童・生徒の間に心のふれあいが裏打ちされていることである。このことは生徒指導や学級経営においても全く同様で、人間としての生き方・在り方の指導が遂行されていくためには、教師と児童・生徒の間に心のふれあいが裏打ちされていることが不可欠である。実践的指導力の概念について考察する時、我々は教科指導・生徒指導・学級経営のいずれを遂行するにも、児童・生徒との心のふれあいが裏打ちされていることが不可欠であることがわかる。

## 2.2 実践的指導力の3要素

実践的指導力はそれが機能するためには、教師と児童生徒の間に心のふれあいという裏打ちが必要であることを上に述べたが、このような実践的指導力の裏打ちとなる資質・能力とは一体何であろうか。先に引用した教養審答申（1987年）で示された実践的指導力の概念を次の3つの要素に分類することによってそのヒントが得られるのではないかと考える。即ち、第一の要素を「教育者としての使命感」、第二の要素を「人間の成長・発達についての深い理解」と「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」、そして第三の要素を「教科等に関する専門的知識」と「広く豊かな教養」というふうに分類してみるのである。そして、この3要素を並列的に捉えるのではなく、教科指導・生徒指導・学級経営等の具体的な教育実践に直結する資質・能力として第三の要素を充て、第一と第二の要素は第三の要素を裏打ちする資質・能力であると捉えるのである。このように実践的指導力を3つの要素に分類し、それらの資質・能力が三重に重なりあう構造として捉えるのである。そして、第一・第二の要素が第三の要素の基礎となっていると捉えれば、養成段階における実践的指導力の基礎の陶冶の内実を究明する手がかりが得られやすくなるのである。

この3要素が重なり合って機能する様は、光の三原色の構成図に模して考えると明確になる。光の三原色である「赤」「青」「緑」を重ね合わせると、三色が重なった真ん中の部分は透明になる。この原理を実践的指導力の構造に当てはめて考えてみると、上述の三つの資質・能力が重なり合って機能している真ん中の部分こそが実践的指導力であると捉えることができる。即ち実践的指導力とは、教師が備えるべき資質能力の3要素が重層的に機能して発現する力であり、教師が教師としての本領を発揮して教育活動をしているときに、自ずと児童生徒の人間形成に作用している資質・能力であると考えられる。

## 2.3 授業の3要素に対応した「人間理解力」「教材開発力」「授業組織力」

実践的指導力を構成している3要素を、授業の3要素である「子ども」「教材」「教師」、並びに教員養成カリキュラムの3要素である「教職科目」「教科専門科目」「臨床経験科目」に対応させてみることによってどのようなことが考えられるであろうか。先ず第一の要素である「教育者としての使命感」を「教師」に対応させ、第二の要素である「人間の成長・発達についての深い理解」と「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」を「子ども」に対応させ、そし

て第三の要素である「教科等に関する専門的知識」と「広く豊かな教養」を「教材」に対応させてみる。そうすると第二の要素の対応関係から浮かび上がってくる教師に求められる資質・能力とは、子どもに寄り添うことのできる「人間力」やコミュニケーション力であると考えられる。そして、このような人間どうしの関係性を築いていく資質能力の基になるのは、教員の養成段階にある学生にとっては深い「友情」(Friendship)を体験することであり、教員養成における「臨床経験科目」が深く関わっていると考えられる。

次に第三の要素の対応関係から浮かび上がってくる教師に求められる資質能力とは、子どもの学びを引き出す「教材開発力」である。これは端的に「学問」(Scholarship)の力によるものであり、教員養成における「教科専門科目」が深く関与しているといえよう。

最後に第一の要素の対応関係から浮かび上がってくる教師に求められる資質能力とは、「子ども」と「教材」を結んで学びを成立させる「授業組織力」であり、教員養成においては「教職科目」が深く関与しているといえよう。子どもを深く理解するとともに教材研究に打ち込み、この両者を結合していく資質能力とは使命感に裏打ちされた企画力であり、この専門性こそは「教師」の本領 (Educatorship) であるといえよう。(濁川・土井, 2003)

### 3. 「信大 YOU 遊世間」において学生が陶冶した実践的指導力の基礎の内実

#### 3.1 丸山大輔 (社会科学教育専攻3年) の事例

彼は運営委員長としての強い責任感に立って1年間の活動をやりとげた。「其の身正しければ令せずして行わる—第1期信大 YOU 遊世間運営委員長として—」と題して、自ら陶冶した実践的指導力の基礎について次のように述べている。

##### ①真剣に教育について語る先輩みたいに自分もなりたい

「2年になりキャンパスが長野に移ると真っ先に信大 YOU 遊広場の説明会に参加した。私の大学生活はここから始まるという新たな決意を胸にどの活動にするかを考えた。…私は興譲館という活動に興味をもった。…初めて活動に参加したその週の反省会に参加した。今思えば、私が運営委員長として現在に至っているそもそもの、そしてすべてのきっかけがこの反省会であった。自己紹介の後に始まった反省会で私は大きな衝撃を受けた。反省会では子どもたちのこと、一日の活動について、自分たちの反応について、それぞれの教育観など、先輩の白熱した議論が夜遅くまで行われた。その様子は喧嘩しているように見えるほどであったが、先輩方はお互いを本気で憎みあっている様子ではなかった。私は居場所がなく部屋の隅で小さくなりながら、自分の胸の奥から熱いものが湧き上がってくるのを感じずにはいられなかった。こんなに真剣に、熱く、子どもたちのこと、教育について語る先輩を目の前にして、こんな人が集う活動ならきっと何か学べるはずだ、こんな先輩方と一緒に活動していきたい、そんな先輩みたいに自分もなりたいたいと強く思い、私が学ぶべき場所はここだと、この反省会で確信した。」

##### ②自分を見つめる苦悩と仲間の支えあい

「それからの毎日は、興譲館漬けの活動であった。空きコマはほとんどすべて興譲館の活

動に参加し、一番遅くに帰る子とは、本当に朝から19時まで1日を共に過ごしてきた。子どもたちとも徐々に打ち解け、先輩方とも仲良くなり、興譲館が私の居場所となっていた。しかし、活動をすればするほど、子どもたちは実に1年の四分の一を私たちと過ごしているという現実、不登校ということを感じさせずに明るく興譲館に毎日通ってくる彼らを前に、ただ時間だけが過ぎ、そして結果的に何もできていない自分、そして、それに気がつかず、興譲館が楽しくてしょうがない、ここが居場所だといった浅はかで、浮ついた気持ち、不登校の子と接することで自分の経験幅を拡大したい、などという自分主体の考え方をしている自分に気がついた。…それから、毎日悩み、日が経つごとに、責任の重大さ、そのプレッシャーに押しつぶされそうな日々が続いた。そんな中、反省会では先輩後輩関係なく喧嘩諍々の議論から何回も衝突し、自分たちができる最良の方法を検討し、実践、反省を繰り返していった。不安で押しつぶされそうになりながらも、多くの仲間と支えあいながら活動が続けることができたように思う。」

### ③教師をめざす自己の使命

「今年度の活動のキーワードは地域貢献でした。…ここで学んだことは私が教師となった暁には必ず子どもたちへ、さらに学校から地域社会へという形で還元していくつもりです。これからの教育は学校のみではなく、地域社会と連携していく必要があります。それを自覚した教師と、地域社会のご理解とご協力を賜り、これからよりよい社会を築いていける子どもたちを育成していくことこそ、教師をめざす一人の大人としての私の使命だと思っております。」

## 3.2 藤田優子（生活科学教育専攻3年）の事例

彼女は副運営委員長として全体の運営の裏方として、1年間にわたって地道に行動した。

### ①活動の振り返りの重要性

「2年生の1年間の活動とその後の自分自身の振り返りによって、臨床経験だけではないという思いがあった。しかし、自分自身がその考えに至ることができたのは多くのことを経験してきたからである。そして、活動・体験したから分かること、体験だけでは分からないことがあることに気づいた。それをうまくつなげて自分自身の成長を感じられるようにするにはどうすればよいだろう？それが私自身の課題の一つであった。終わった活動を振り返るのは面倒なこと。まして新しく入ってきた2年生にとっては、どうしてそんなことをやるのだろうかと思うかもしれない。活動全体のなかでは振り返ることができなくても、どこかでそれを少しでも考えるようにしようと思っていたが、結局はなかなかそれ続けることができなかった。…この1年間の活動をじっくりと振り返ることのできる実践記録こそ、とても重要なもので今まで活動重視であった私たちにとって必要なものであると思う。」

### ②教師への夢を確認

「2年間の様々な活動、特にプレーパークの継続的な活動によって、私自身は本当に子どもが好きであるということ、そして、小学生の頃から抱いていた夢（教師になりたい）と

いう目標にただひたすら走っていた自分自身への疑いの念が全てとはいかないが、やはり教師になりたいと気づくことができた。」

### ③face to faceでのコミュニケーションの重要性、人と人のつながりの重要性

「何かを伝える時に、人づてなどではちょっとしたニュアンスの違いから生じる誤解が起こったりする。お互いが嫌な思いをしないためにも、きちんと自分で話すことが大切であるということを学んだ。そして、人と人のつながりの大切さも学んだ。私はこの1年間の自分自身の様々な活動において、多くの人と知り合うことができた。そして困った時には助けてくれる友人も沢山いることに気づいた。そのような周りの人とのつながりは、私にとってかけがえのないものである。」

### ④常に学ぶ姿勢をもち人間として成長

「何よりも大きな学びは、多くの活動をするたびに少くく知識を多く詰め込んでいた分かったような気になっても、一度外に出て活動してみるとあらゆる場面で自分の小ささや無力さに気づくということである。それは教師をめざす私にとってとても重要なことではないかと考える。…常に自らが学ぶという姿勢でいるということは教師になる、ならないにかかわらず人間として成長するかどうかということ、とても重要なことであると思う。このようにYOU遊世間の臨床経験活動を通して、人間性を養うことができたのではないかと考える。」

## 3.3 五味潤嘉（社会科学教育専攻3年）の事例

彼は2年目の興譲館長として、不登校生との関わりを忍耐と勇気で結実させた。

### ①この人についていけば間違いないと思える友人との出会い

「私は平素、自分のことを極悪人だと思っている。そして、私は出会う人のうち7割から9割の人に対して好意をもつことができず、こいつは嫌いだと思ってしまう人生を送ってきた。それは教育学部に入ってから同じで、出会った人を知っていく過程で、ああ俺はこんな人に教育されなくて良かったと思うことがしばしばあった。そんな私にも好意を抱ける存在がいた。それがA君であった。…2年生になってA君がYOU遊広場の活動に参加しようとしていることを知り、迷うことなくついて行くことにした。」

### ②興譲館での苦悩・辛苦の日々、不登校生をかわいそうだと思った気持ち

「不登校、不登校っていうけど、子どもなんてみんな一緒だろう。俺が行って何とかできない子どもなんているのかなあ、そんな大層な驕りと絶対の自信は1ヶ月も立たないうちに私の中から忘れ去られていったと思う。興譲館の子どもたちは私が見てきた子どもとは明らかに違っていた。それまでの私は、子どもというのは自分にとって元気や楽しいという感覚を与えてくれる存在であり、それゆえ人間嫌いで極悪人の私でも子どもは好きになっていきやすい存在だなあと感じていたのだが、興譲館の子どもたちはそうではなかった。松の部屋にいて一緒に話をしていると次第に気分が沈んでくるのである。そんな子どもたちと週に3回顔を合わせて関係を築いていくのは、サッカーや他の運動をしているときはともかく、精神的に苦痛でしかなかった。それに加え徐々に「やだ」「なんでやらなきゃいけ

ない」という発言ばかりを繰り返すようになってきていた子どもたちを相手に、…彼らの大嫌いな勉強をやらせていくのは吐き気のするほど大変なことだったのを憶えている。そんな苦しい思いを抱えながらどうして辞めずに活動を続けたのか。それは彼らを放っておけなかったから、もう少し率直に言えばあまりにもかわいそうだと思ったからである。」

### ③真剣に協力者を求めたこと

「興譲館長をやる上でスタッフ集めは最重要の課題であると思った。そして人間嫌いの私にとってそれは難題にほかならなかった。…心配だった私は、それまでもずっと活動の悩みや苦しみを聞いてくれていた数少ない友達であるS君に参加してもらうことにした。S君は私と同じで不登校には一切興味がないとのことだったが、私を助けるということで参加してくれた。…この人ならやってくれると感じたK君に参加してくれるように頼み、何とか説得して参加してもらうことになった。このことが大きかったと思う。」

### ④書くことによるコミュニケーション

「興譲館の部屋の黒板には2人が来る前に自作の詩や、やる気をおこさせるための言葉を書くようにしたが、いずれも反応はきわめて薄かった。それでも続けようと思った。自分の文章は自分にしか書けないものだし、その子を見ている自分にしか書けないことがあると思ったからだ。…良いことをしているはずだと思ったからだ。…読んでもらいたいけど読んでくれない。それでもいつか読んでくれるかもしれない。だから続けるんだと思って、なるべく思いを込めて書くようにした。…これからも課題の一つとして少づつでも書いて伝える力をつけていきたいと思う。」

### ⑤ぶつかり合うこと

「ふれあうことの延長にぶつかりあうことがあると思う。この1年を通して一番印象に残っている出来事が、興譲館に通ってきた2人の子どもとそれぞれ1対1で、本気でぶつかり合ったことである。一人の子とは…その子の中にある逃げの心みたいなものを見逃すわけにはいかないと、強く叱りつけた。…もう一人の子とは…やりもしないうちから物事を決め付けてしまう心、今までつながってきた人間を信頼できない心を嘆き、そんな心ではいけないと熱心に説き続けた。」

## 3.4 前崎伸周（教育実践科学専攻3年）の事例

彼は信大牟礼ふるさと農場長、第3回YOU遊フェスティバル実行委員長として活躍した。彼は「仲間と共に歩んだ一年間—信大YOU遊世間の新たな出発—」と題して、自らの実践的指導力の基礎の陶冶について次のように述べている。

### ① 人と人の心がつながるうれしさ

「こうした人と人とのつながりで集まった170人の学生スタッフで今年のフェスは開催された。ここでやはり問題となったのが意識の違いである。こちらがいくら熱く説明しても、冷めた反応しか返ってこない。こちらがいくら集まってくださいと呼びかけても集まってくれない。これが現実だと思った。どうしたらいいのか、なぜもっと熱くならないのか怒りがこみ上げることもあった。だが、当日参加してくれる120人の子どものためにも

最高のフェスにしたいと重い、とにかく熱心に語りかけ、楽しく笑顔で活動することを心がけた。こうした思いが徐々に伝わったのか、フェスが近づくにつれて竹の部屋は活動するスタッフでいっぱいになっていった。とてもうれしかった。一人ひとりが YOU フェスのためになにか関わろうとしている。このことがうれしくて仕方がなかった。」

## ②同級生への尊敬

「YOU 遊世間の活動をはじめから私は、他者（同級生）を尊敬することができるようになった。私は根っからの負けず嫌いで誰にも負けたくないという思いから、なかなか相手を認めようとしなかった。特に同級生に関しては絶対に負けたくないという思いがあった。しかし、YOU 遊の活動に携わっているメンバーはそれぞれに自分の考えをしっかりと持ち、他者を認め、人のために自分を犠牲にできる人ばかりであった。そうした仲間の姿を見たとき、素直に感動した。尊敬もした。自分はまだまだだと感じた。…本音で何でも言い合える仲間、教育について自分の考えを熱く語り合える仲間、時にはばかをしてはめをはずしあえる仲間、ここで得た仲間とは一生付き合っ生きていたいし、これから教師の道に進んでいった後も現場のライバルとして彼らと教育を支えていきたい。」

### 3.5 北川伸尚（障害児教育専攻3年）の事例

信大茂菅ふるさと農場長として活躍した彼は「素敵な自分になるために一茂菅ふるさと農場での思い出から」と題して、自らの力量形成について次のように述べている。

#### ①進路のきっかけを求めて、農場長をやってみようとした思い

「今年自分の人生の中で進路のきっかけの年になると考えていた。理由は大きく二つある。一つは教育実習での体験である。…もう一つは今年の茂菅ふるさと農場で農場長という大役をすることである。…自分自身が農作業をしたいとの希望、この機会を逃せば一生できないような体験を目の前にしているという状況、やりたい人がいて自分がやろうよと掛け声をかけることでその人たちも楽しくできるのであれば、掛け声くらいいくらでもかけたいとの人のためにという思い、こうしたいくつもの思いや考えから農場長をやってみようと思ったのであった。」

#### ②魅力ある素敵な人間に

「どうして自分が成長したいと思うのだろうか。…自分は自分なりに輝きたいがために成長したいと思うのである。…自分の言いたい輝くというのは魅力のある人になりたいという意味である。…人間は誰でも魅力のある人に惹かれるものだ。今後自分が教師として、またそれ以外の立場に立ったとしても、自分という人間が人として生きていくうえで魅力ある素敵な人間でいたいのだ。自分は今まで特にこれだけは誰にも負けない、これだけは自分が自慢できる、そういうものがなかった。そんな今の自分にとって、魅力ある素敵な人間になるための一要素となり得るもの、それが教育実習なり農場長であったのだ。」

#### ③自分が成長したと思えること

「まず慣れたことの一つに人前で話をするということがある。…人前でそれなりに話ができるようになった。子どもたちを意識した簡単な言葉づかいに心がけられるようにな



った。…子どもたちを前にしたとき、以前であればどこか作った笑顔で接し、わかったような顔をして会話をしていたように思う。しかし、今では自分が接しやすい自分の姿で子どもたちと向き合うことができるようになった気がする。」

#### ④やり遂げた達成感、充実感

「自分にとっては1年間最後まであきらめずに頑張ることができたこと、茂菅の子どもたちとも障害をもった子どもたちとも活動できたこと、学生スタッフと準備して企画・運営できたこと、それ自身が自分にとって自慢だ。…辛いことがあったからこそやったぞといえるのであろうし、楽しかったと思えるのだらう。」

### 3.6 熊田賢人（障害児教育専攻3年）の事例

彼は障害をもった子どもと関わる「虹色アトム」のプラザ長として活躍した。「学びの広がり—鉄腕アトムの一員から虹色アトムの統率者へ—」と題して次のように述べている。

#### ①子どもの可能性をもっと信じること

「鉄腕アトムでは個別対応について考えさせられた。ただ知識として詰め込んだだけでは、何の役にも立たないことを痛感した。知識として得た理論を意識していくからこそ、その場で的確な対応ができるようになるのである。行き当たりばったりの対応では何も学びとして残らない。だから理論や原理、原則にかなった教育技術を身につけなければいけない。自分のためではなく、自分と関わる子どもたちのためである。そして、子どもの可能性を信じ続けることを何よりも学んだ。」

### 3.7 石関千絵（社会科学教育専攻3年）の事例

「キャンパス・プレーパーク」のプラザ長をつとめた彼女は、「プレパ日和—YOU 遊世間で得た人と人との関わりを通して—」において次のように述べている。

#### ①魅力的な先輩への憧れを原動力として

「2年生になってプラザの活動に取り組むようになってから、私は先輩方に憧れた。しっかりとした意見と豊富なアイデアを持ち、いつも笑顔で子どもたちに愛される。遊ぶときは思いっきり遊ぶ。激しく時にはけんかするくらい議論する。私が間違ったことをすればきちんと叱ってくれる先輩方。私はいつもいつもそんな先輩のようになりたくて仕方なかった。」

#### ②地域に価値ある人間関係を築けたことへの喜び

先輩のようになりたいという具体的な成長目標をバネにして、彼女は1年間にわたり木曜日の放課後と土曜日に「キャンパス・プレーパーク」を開設した。

「大学への道を歩いていると、ちょうど登校中の加茂小、西部中の子どもたちに出会う。その中の5人に1人くらいはお互い見知った顔で、気づくと“おはよう”と言い合う。信大生の中で朝、小学生とあいさつしつつ学校に来る学生なんてそうはいないはずだ。一見なんでもない普通のことのようにだが、それが私の密かな自慢でもある。」

彼女はデパートやスーパーでの買い物をしているときに、プレパに来ている子どもの保護者から「こんにちは」「いつもお世話になっています」と声をかけられることが何度もあ

ったという。その時、彼女は「活動を通して地域の方々との関係を築けたことを感じる。なんだか“地域に溶け込んでるなあ”という感じがするではないか。それが活動を通して得た価値のある人間関係だと思う。」

#### ③友達ができ信頼関係を作ることができた自信

「忘れることができないのは平成15年3月6日から11日にかけて行われた第3回全国フレンドシップ活動を通して得た仲間たちの存在である。…全フレを作り上げた仲間であるからこそ、ただ遊んだだけでは築けないような信頼関係を作ることができたのだと思う。全フレは…全国各地に友達ができたということがとてもすごいことだと思っている。」

「私には泣いていると一緒に泣いて、助けてくれる先輩がいる。一緒に悩んでくれる仲間がいる。名前を呼んで、側によってきてくれる子どもたちがいる。2年間活動してきた中で私が学んだことは『人の温かさに触れた人は、“人のために”という心が育つ』ということだ、とその時思った。そして、そんな人間関係を得られたことが何よりもプラザを頑張ってたよかったですと切実に感じた。」

#### ④涙を流すことができる人間に成長

「私という人間を表す言葉として絶対に欠かすことのできないものの一つが“泣き虫”だ。悲しくて泣き、寂しくて泣き、そして嬉しくても泣く。…こんな私だが、大学に入るまではそれほど泣き虫ではなかった。しかし、YOU遊広場、YOU遊世間の活動を通して、信州の豊かな自然と温かい人間性に触れたことで涙を流すことができる人間に成長することができたと思う。泣き虫だし、いい言葉も並べられない。笑顔も下手だし、不器用だけど、ありのままの気持ちを表現できる人間になれたかなと思う。」

## 4. まとめ

7人の実践報告を丹念に読んでみると、学生たちが本源的に求めている実践的指導力の基礎とは、人と人との心のふれあいであり、そのふれあいを通して自己を発見し、教育者の道への使命感を深く自覚できる喜びを体験することであったと考えられる。彼らは「信大YOU遊世間」の実践に主体的に取り組み、仲間と苦楽を共にすることによって、教師に求められる実践的指導力の基礎を確かに陶冶していると考えられるのである。

## 文献

関川光彦・土井進・越智康詞, 1997, 「教師に求められている実践的指導力修得への方途(1), 信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要第5号, 長野, pp. 241-250

濁川明男・土井進, 2003, 「今, 求められる教員養成における「実践的指導力の基礎」の育成」,

『新免許法に対応する教員養成課程体験的カリキュラムの体系的構築に関する実践的研究』, 平成12~14年度科学研究費補助金研究成果報告書, 上越教育大学, 新潟, pp. 3-9

土井進編, 2004, 『信州大学における「地域貢献」の教員養成—「信大YOU遊世間」の実践—』, 平成15年度学長裁量経費による研究報告書, 信州大学教育学部, 長野, 全235頁

(2005年4月30日 受付)